

構造家・加藤征寛 「勘と度胸とどんぶり勘定」

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■上州気質

1976年生まれの加藤征寛さんは、設計事務所を経営していた両親をもつ。群馬県伊香保温泉の近くの田舎では、構造設計だけでの事務所では成り立たない。頼まれたら住宅も施設も店舗も、意匠も構造も何でもする設計事務所が当たり前。そんな環境から、東京理科大学工学部に進み建築を学んだのは自然な流れだったろう。そして、「跡を継ぐ」と自分の仕事人生を「漠然と…」決めていた。が、大学生の時に父親の突然の他界で、大きく進路を変えることになる。今、加藤さんは東京新宿区の下町風情が残る西五軒町で、構造設計事務所MID研究所を主宰する。

設立したのが12年前の28歳だったが、独立したいという想いは最初からあった。法規の改正などで、ちょうど構造家が必要になる時期の起業だったし、それから順調な営業が続いている。「儲かっていますか？」と聞く覇志堂に「構造ではなかなか難しいですよ」と答える声は経営者の落ち着き。母校の東京理科大学で非常勤講師も勤め、故郷の大学に対しては「建築」でもっと伸びて欲しいと思う。「いつか故郷に恩返しがしたい」というのは、上州の義理堅い気質です。教育の場で成される日が遠くないかもしれない。

■SDG 育ち

大学の掲示板で見つけた構造設計集団(SDG)のバイト募集の張り紙。それが渡辺邦夫先生との出会い。富山県総合福祉会館の模型づくりが初めての仕事だった。「渡辺先生は学生が好き…」と加藤さんはいうが特別可愛がられたのかも。「バイト中の仕事は楽しかった」。一転所員になると、「行政と喧嘩しても通して来い」などキビシイお達しが飛んだ。そんななか続けられたのは、竣工したときの嬉しさがあったから。「自己満足ですけどね」と付け加える。横浜港大さん橋国際客船ターミナルと不二女子高等学校が



印象に残っている。SDGで習った構造模型をつくっての検討は、今も多くの仕事に欠かさない。「構造設計することと、模型づくりとは似ている。重要なのは触感なのです」。

■木構造に惹かれ

6年間、腰原幹雄東京大学生産技術研究所教授が理事長をしているNPO法人・ティンバライズ(Timberise)で理事としても活動している。木材のtimberから考え出された造語のネーミングで、木を新しい素材として捉え、これまでの木造の伝統や監修に捉われることなく新しい可能性を模索し、新技術や木造デザインを構築することで、社会に広く提案することを目的としているNPO法人。加藤さんは、腰原先生のSDGの後輩だから馳せ参じて活動しているのだ。レクチャーを行い、貢献した建築には賞も出している。2014年に筆者在籍のTH-1で施工した「加須の美容院」(設計/マウントフジ)がグランプリを受賞していたと分かり親しみを感じた次第です。

■癒しは呑みで

薬剤師の愛妻がお帰りを待っているのに寄り道。酒場に立ち寄り自分だけの時間も大事にしている、大人な男性なのです。地方へ出かけても必ず落ち着ける店を探すというから趣味といえます。「勘と、度胸と、どんぶり勘定が建築というものだね」と独り言をいながら杯を重ねるカウンターの加藤さんを探してみたい。

模型で触覚を働かせることも「勘」の一つだし、安全を担うには「度胸」ある決断が不可欠。「どんぶり勘定」で当たりを付けることもプロとして当然と思う。構造力学と建築をリンクしやすいようにしたいし、大学の研究室やSDGで学んだPCも本格的にやりたい、と願うのは、若手構造家の核となる加藤征寛さんだから。